

## ■減らすのだって楽じゃない

私の場合は定年退職だったが、定年があろうとなかろうと、大学教師、文筆業者、編集者、ジャーナリストなど、ある量の蔵書を持たないと商売にならない職種の間は、古稀をこえるあたりで、たいていは大きな決断をせまられる。

これまで所蔵してきた本を死ぬまで持ちつづけるか、それとも思い切って処分してしまうか。そこにもうひとつ、決断をすこし先のぼしするという決断も加えて選択肢は三つ。さて、そのうちのどれをえらぶか。

私がえらんだ方向は前回にのべたとおり。手持ちの本の量を、かぎられた時間に見合うていどに減らしておくこと。そう考えた理由はいくつかあるが、なかで大きいのが、これまで編集者や大学教師や大学図書館の館長として、少なからぬかすの職業的インテリの死とつきあってきたことだった。

私の蔵書をいちおう七千冊と見積もれば、草森紳一や久保覚はその六倍から八倍ぐらい。ほとんどの職業的インテリの蔵書数はそのあいだのどこかに位置すると見てよからう。

平均して蔵書数がもっとも多いと思われるのが大学教師である。もともと本好きの上に、研究室という名の専用書庫が大学からタダで提供され、やはり研究費の名目で内外の本があるていど自由に買えるから、草森・久保クラスの蔵書家はいくらもいる。科学史家の村上陽一郎もそのひとりらしく、「これまでに読んだ書物は一日平均三冊とすると六万冊強ということになります」という一行が、最近でた『あらためて学問のすすめ』という本にあった。村上は私の二歳上。すると一日三冊、一年間に一千冊読んで六十年という計算なのかな。

専門書と「いわゆるエンターテインメント」（村上）をひっくるめて、毎日、これだけの量の本を読むからには、とうぜん蔵書も多い。

二十年前に新築した家の書庫は、特別に土台を補強した床に鋼鉄製レールを敷いて、移動書架を入れ、相当収納できるつもりだったのに、とうの昔に満杯、廊下から玄関まではみ出し、堪りかねて近所に借りたアパートの一室もすでに溢れてしまい、さらに以前勤務した大学の研究室に保管した書物は、トランク・サーヴィスに預け、その数段ボール箱七十個、預け先の都合で引き上げることになり、今の大学の研究室に眠ったまま、間もなく退職を迎えて、どうしよう、と迷うばかりです。（略）私が死んだら、皆処分して構わないと言い置いてはありますし、間違っても、図書館に寄付などして、こんな貧しい蔵書なのかと、死に恥を晒すようなことはしてほしくないのです。もっとも最近はこの図書館も、新刊書を受け容れるだけで手一杯で、おいそれと引き取ってくれないのではあります。

村上もいうとおり、いまの図書館は本の寄贈や買い取りをあまり歓迎しない。公立図書館はもとより、予算の削減になやむ大学図書館からも、教師や元教師がのこした蔵書をまとめて引きうけるというような余裕は急速に失われつつある。空きスペースも整理する人手もないから無償でもだめ。やむなく貴重な近代文学資料を一括してアメリカの某大学図書館におさめた、というような話がいくらもあるのだ。

そうなると、あとは古本屋に頼るしか手がない。ただし十年まえ、二十年まえにく

らべると、古本の買い取り価格はきわめて安い。極端に言えば、タダ同然。おまけに売れそうにない本は持ち帰ってもくれないから、やむなくじぶんでゴミ置き場に捨てにゆくことになる。このじぶんは本の所有者ではない。その家族、もしくは若い友人や教え子たち。なにしろ本来の所有者は「私が死んだら、皆処分して構わない」と無責任にいいおいて死んでしまったのだから。

死んだ者の願いがどうあれ、社会的には、のこされた蔵書はただの可燃ゴミか、それに類するなにかにすぎない。

しかし、だからといって「勝手に処分してくれ」といわれても、そう簡単にはいかない。一昨年、私の母が九十四歳で死んだ。職業的インテリではない。ふつうの主婦だったが、本が好きで最後をむかえた有料老人ホームの自室にも三百冊ほど本があった。それを処分するだけで、正直、へとへとになった。

家族にせよだれにせよ、死んだ人間の思いがこもった蔵書を、まだなまなましい状態のまま、捨て値で売ったり廃棄物として燃やしてしまったりする。実際に「思いがこもって」いたかどうか、怪談にでてくる鏡や櫛ではないから、そこはわからん。でも、まわりの連中につきそう感じさせてしまうようなお化けじみた一面が、電子本ならぬ「モノとしての本」にはたしかに存在するようなのだ。そのため本の廃棄が親しい人間の廃棄のイメージにかさなり、体よりもさきに気持のほうへとへとにさせられてしまう。

草森・久保・村上といった人びとにくらべれば、私の蔵書など質量ともに、たかが知れている。お化け度もはるかに低い。そのていどの薄味な蔵書でも、おなじようにつらい思いを、のこった人たちにいだかせてしまいかねない。どうも私はそれがイヤみたくないのである。

\*

こうした理由もあって、七十代にはいるや、すぐに蔵書の削減計画にとりかかった。

いちばんいいのは、全蔵書をいちどに売り払ってしまうことだろうが、残念ながら、これにはそうとうの体力と気力を必要とする。そのことは以前、二十代のころ実際にやってみてわかった。なにしろ四千冊ほどの蔵書消滅のショックから立ちなおるのに半年以上かかったのだから。

その後、平均して三年にいちどの割合で繰り返した引っ越し体験もあって、蔵書の処分はまとめて一度にやってしまうよりも、何回かに分けて小刻みにやったほうが楽みたい、と思うようになった。

一引っ越し日を決めたら、ひと月ほどまえから、毎日の仕事の合間に段ボール箱ひとつでも、とにかく本をつめて部屋の奥に積んでゆく。並行して不要な本をべつの場所に積み上げ、適当な日に古本屋にきてもらったり、手伝いにきた若い連中に押しつけたりして、全体の三分の二くらいまで、だらだらと減らしておく。

この方式がうまくいっていたので、こんどもおなじやり方でやることにした。あらためて書くと、体がまだうごくあいだに七千冊ほどの蔵書を一千冊に減らす。ただし急ぎすぎはいけない。とりあえず四段階に分け、一段階あたり三か月、計一年ぐらいかけて、のんびり減らしてゆくこと。

このプランにしたがって、まず第一段階の千五百冊のうち、三分の一強の七百冊を

仕事場の本棚から抜きだして廊下に積んでいった。ここまではまあ自動的にこなせる。いらぬ本、きれいな本、もはやゴミと化しつつあるボロボロ本などを、なにも考えず、見つける端からさっさと除去していただく。

さて、のこり八百冊一。

すこし隙間ができた本棚をいくらかていねいにチェックし、トイレとか食事とか、なにかのついでに二十冊から三十冊ぐらいずつ廊下にはこんでおく。このころになると、まだ多少愛着がのこっている本や、もしかしたらこのさき必要になるかもしれない本がまじってくるので、けっこうきびしい判断をせまられたりする。それなりに疲れる。それでも五週間かけて、なんとか五百冊ほど減らすことができた。

第一段階の開始から、ここまでで約二か月。そろそろ、つきあってもらう古本屋さんをさがさなくてはならない。千駄木の「古書ほうろう」に頼むかな、と旧知の南陀楼綾繁こと河上進氏にメールで相談し、いいんじゃないですか、というので、そうすることに一。

店主の宮地健太郎氏もOKとのことで、夏のはじめ、私の家がある浦和まで車で買いとりにきてくれた。綾繁さんも同行。その場でバタバタと百冊ほど追加して、すこし足りないが、第一段階の目標をほぼ達成、汚いけど、啞然とするほどうまい駅前の韓国料理店で、ささやかに祝杯をあげた。

「古書ほうろう」は古書組合に加入していない。したがって買いとった本を市場にだすこともしない。一冊一冊、じぶんの店で売る。そういうこともこのときはじめて知った。

すべての作業が「手から手へ」の、まともすぎるほどまともなあきない。宮地氏のおだやかな挙動からも、そんな感じがすなおに伝わってくる。大量のゴミ本をふくめて持ち帰った本を時間をかけて査定し、値段のついたものが九四九冊、つかなかったものが四七四冊。第一段階だからね、まあ、そんなものでしょう。私の想定からすれば、じゅうぶんに納得がゆく価格で買いとってくれた。

\*

さて、あと三段階。のこり千五百冊×三回の計四千五百冊である。

ただし私の性向として「ねばならない」で押しとおすと、かならず途中でいやになる。そこでそうならないように、そのつど、たまたま気がついたふりをして、さり気なく作業をこなしていく。この「さり気ないふり」は、もうおれは根気や気力で仕事をする気はないぞ、というじぶん向けのアピールでもある。いや、わざわざアピールせずとも、じつはもう、そういうふうにはしか動けなくなっているのですがね。

で、いそいで結果をいうと、その後、第二段階が半分ほどすんだところで今次計画は中断したままになっている。中断というか、どうのんびりしたふりをしてみせても、こうした「キチキチ村のキチ兵衛さん」式の律儀なやり方は私には向かない。そのことをあらためて確認させられるはめになった。だから正直にいうと計画放棄。ざんねんながら今回は負け。あとにのこされる人には申しわけないが、とにかく二千五百冊ほどは減らしたのだから、それでよしとしてくださいな。

減らす本と残す本との分別は、このテーマはもうこのへんでいいやというのと、この先もつきあってゆくテーマとの分別でもある。がんばって減らさずとも、のこされ

た時間が少なくなるにつれて抱えているテーマも減る。テーマが減れば蔵書も自然に減るだろう。それが最後の希望である。最終的に半分ぐらいに減らして成仏できればということはないのだが。